

『源氏物語』須磨「ものをものたまひあはずべき人」について

——「あふ」「あはず」の語義の相違をふまえて——

内 藤 聡 子

一、はじめに

① 近き所どころの御庄の司召して、さるべき事どもなど、良清朝臣、親しき家司にて、仰せ行ふもあはれなり。時の間に、いと見どころありてしなさせたまふ。水深う遣りなし、植木どもなどして、今とは静まりたまふ心地現ならず。国守も親しき殿人なれば、忍びて心寄せ仕うまつる。かかる旅所ともなう、人騒がしけれども、はかばかしうものをものたまひあはずべき人しなれば、知らぬ国の心地して、いと埋れいたく、いかで年月を過ぐさましと思しやらる。¹〔須磨（2）一七九—一八〇〕

用例①は、京を離れた源氏が退去した須磨の住居の様

と、源氏の心の描写である。「良清朝臣」をはじめ「近き所どころの御庄の司」の尽力により、住まいは然るべく調べられた（「時の間に、いと見どころありてしなさせたまふ」。「国守」といった親しく、「心寄せ」て仕える人々の存在を肌身に感じながらも「かかる旅所ともなう、人騒がしけれども」、「はかばかしうものをものたまひあはずべき人しなれば」と、源氏は認識する。

「はかばかしうものをものたまひあはずべき人しなれば」について、諸注釈書はどのように説いているのであろうか。現行の注釈書、『全集』は「てきぱきと話し相手になれそうな人もいるわけではないので」、『新潮日本古典集成』（新潮社）は「まともにお話し相手になさることのできる人もいないので」、『新編日本古典文学全

『源氏物語』須磨「ものをものたまひあはずべき人」について

——「あふ」「あはず」の語義の相違をふまえて——

集』小学館（以下『新全集』）は「しっかりしたご相談相手になれそうな人がいるわけでもないの」と説く。なお『新日本古典文学大系』（岩波書店）は、注を付さない。

古注釈書、『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』『細流抄』『孟津抄』『岷江入楚』『玉の小櫛』は、いずれも注を付さない。

「人騒がしけれども、はかばかしうものをものたまひあはずべき人しなければ、知らぬ国の心地して」の一節は、先行研究に従えば「話し相手・相談相手」の不在によって、「知らぬ国」に突然放り出されたような孤独感、寂寥感を覚える、と解されるが、苦渋の決断で須磨に退去した源氏の境遇・心情に鑑みても、「ものをものたまひあはずべき人」について理解を深める必要があるように思われる。何より諸注釈書は、「のたまひあはず」と「あふ」の語義の相違をふまえて、当該箇所を理解する必要がある。

さて、「のたまひあはず」の「あはず」（動下二）、さらに「あふ」（動四）について、『古語大辞典』²は次のよ

うに記す。

あはず【合はず】「他サ下二《あ（合）ふ》の他動詞形》

- ①一つにする。一致させる。適合させる。②音楽や楽器の調子を合わせる。また、合奏する。③香や薬などを調合する。④夢で吉凶を判断する。⑤対面させる。顔を合わせる。⑥出くわす。そういう目に遭わせる。⑦（多く「…にあはせて」の形で）時を同じくする。同時にする。⑧配す。（男と女を）めあわす。配偶させる。⑨相対比させる。比べる。⑩（鷹をあはず」の形で）鷹狩で、鳥に向かつて鷹を放つ。鷹を向かわせる。⑪砥石にすり合わせて刃をとぐ。

あふ【合ふ】《会ふ》と同源》

- ①「自ハ四」①一つになる。相和する。調和する。②つりあう。均衡がとれる。匹敵する。かなう。③二つの事が合致する。④《動詞の連用形に付いて複数のものの動作を表す》互いに…しあう。共同して…する。みんな…する。

②「他ハ下二」合わせる。一つにする。合わせ混ぜる。

あふ【会ふ・逢ふ・遭ふ】「自ハ四」《二つ以上のものが一緒になるの意》

①会う。出会う。②偶然に出くわす。来合わせる。ちようど差し掛かる。③面と向かう。対する。④(男と女が)面会する。交合する。結婚する。⑤對抗する。張り合う。立ち向かう。手合わせする。戦う。

「あはす」が、「二つ以上のもの」を「一つにする」「一致させる」作用であることをふまえて、「のたまひあはす」を把握する必要がある。

さて次の用例②は、源氏が明石を離れ京へ出立する日の光景で、「言ひあふ」(動四)が用いられている。³⁾

② うれしきにも、げに今日を限り³⁾にこの渚を別るることなどあはれがりて、口々しほたれ言ひあへることどもあめり。されど何かはとてなむ。

〔明石(2)二五七〕

源氏の従者が各々の複雑な心境、感慨を自由に発言している様子が、「口々しほたれ言ひあへることどもあめり」であろう。「されど何かはとてなむ」という省筆の表現が、そこに居合わせた人々が、それぞれ忌憚なく発言したので

あろうことを想像させる。「言ひあふ」に、「口々」の表現が伴う点は、「言ひあはす」には認められない特徴であり、当該用例①の「のたまひあはす」を検討するうえに参考になる。

「三月二十日あまりのほどになむ、都離れたまひける」(須磨(2)一五五)とあるように、源氏が須磨に退去したのは春三月だが、用例①に続く「長雨のころ」、源氏は京へ使者を立て、文を送る。「知らぬ国の心地」する源氏が、文を書いた宛先は、紫の上、藤壺、朧月夜、左大臣家、六条御息所等であった。これらの人々は、当該の「はかばかしうものをものたまひあはすべき人」を具体的に考えるうえに示唆的である。

「いかで年月を過ぐさましと思しやらる」と、須磨でのこれからの暮らしへの不安を吐露する源氏だが、須磨に居を移したばかりの源氏が直面した問題の深刻さ、その本質に迫るためにも、当該用例①の「のたまひあはす」の意味を捉え直して、「ものをものたまひあはすべき人」を明らかにすることが求められる。

二、検討対象

源氏物語において、「あはす」(動下二)は40例見られる。^④表1は、「あはす」の対象と用例数を示したものである。

また表2は、源氏物語中の「あはす」が下接する複合語と用例数の一覧表である。『源氏物語大成』(以下『大成』)に列挙されている「あはす」の複合語(一五頁)を引用した。但し、ここに記載のない「うちかたらひあはす」「かきあはす」を追加した。また、「ひやうしあはせ」は除いた。「のたまひあはす」について、『大成』は4例とするが、3例に改めた。^⑤

なお備考欄については、宮島達夫他編『日本古典対照分類語彙表』(笠間書院、二〇一四年)付録CDを用いて「あはす」を検索し、その検索結果に拠って、作品名・用例数を記入した。

当該用例①の「のたまひあはす」を説明するべく、本稿においては、表2におけるNo.1〜8の語、「言ひあはす」(17)・「のたまひあはす」(3)・「のたまはせあはす」(1)・「語りあはす」(4)・「語らひあはす」(3)・「うち語ら

ひあはす」(1)・「聞こえあはす」(5)・「問ひあはす」(1)の全35例を検討対象とする。

三、主体と対象

検討対象の35例について、誰が「言ひ・のたまひ・語り・語らひ・聞こえ・問ひ+あはす」のか、主体について調査した。表3は、主体と用例数を示したものである。また備考欄に、誰と誰が「くあはす」のか、具体的に表

表1 「あはす」の対象及び用例数

対象	用例数
楽の音	13 (注1)
薫物	7
心	5
夢	4
人 (配偶の意)	3
物語絵	2
腰折れ歌	1
いびき	1
時	1
その他	3
合計	40

(注1) 13例中1例(若菜下1155^⑤)は、「物の音」に「虫の声」を「よりあはす」用例である。

表2 源氏物語における「あはす」複合語及び用例数

No.	語	用例数	備 考
1	いひあはす (言合)	17	蜻蛉=4 枕=13 紫=2 宇治=8 平家=4
2	のたまひあはす (宣合)	3 (注3)	枕=1 平家=3
3	のたまはせあはす (宣合)	1	
4	かたりあはす (語合)	4	枕=2
5	かたらひあはす (語合)	3	
6	うちかたらひあはす (語合)	1	
7	きこえあはす (聞合)	5	蜻蛉=1 大鏡=1
8	とひあはす (問合)	1	
9	おもひあはす (思合)	31	枕=1 新古=2 宇治=2 平家=1
10	おぼしあはす (思合)	24	竹取=1 大鏡=1
11	ききあはす (聞合)	14	
12	きこしめしあはす (聞召合)	3	大鏡=1
13	みあはす (見合)	17	蜻蛉=3 枕=2 紫=1 大鏡=1 宇治=10 平家=3 徒然=1
14	かぎあはす (嗅合)	2	
15	ひきあはす (弾合)	3	
16	かきあはす (掻合)	18	大鏡=1 宇治=1 平家=1 徒然=1
17	かきならしあはす (掻鳴合)	1	
18	しらべあはす (調合)	1	徒然=1
19	うちあはす (打合)	5	枕=1 大鏡=1 宇治=1
20	ふきあはす (吹合)	10	紫=2 徒然=1
21	さしあはす (合)	2	大鏡=2
22	おしあはす (押合)	1	平家=1
23	おしまきあはす (押巻合)	1	
24	ゆひあはす (結合)	1	
25	つくりあはす (作合)	2	
26	あけあはす (開合)	1	更級=1
27	いどみあはす (眺合)	1	
	合 計	173	

- (注1) 源氏物語については、池田亀鑑編著『源氏物語大成』(中央公論社、1979年)、巻四、索引篇を用いた。
「あはす」の複合語については、15頁に列挙されている語を引用したが、ここに記載のない「うちかたらひあはす」「かきあはす」を追加した。また、「ひやうしあはせ」は除いた。
- (注2) 備考欄については、宮島達夫他編『日本古典対照分類語彙表』(笠間書院、2014年)付録CDを用いて「あはす」を検索し、その検索結果に拠って、作品名・用例数を記入した。
- (注3) 『源氏物語大成』は「のたまひあはす」を4例とするが、「のたまはせあはす」項の若葉下1211⑩を「のたまひあはす」項に重複して載せているため、3例と改めた。

「源氏物語」須磨「ものをものたまひあはすべき人」について——「あふ」「あはす」の語義の相違をふまえて——

示した。なお、母親と乳母が「言ひあはず」用例については、「主に近侍する人々」の項目にも計上した。

「くあはず」主体として最多は、主に近侍する人々（女房・命婦・乳母等）や庇護する人々（12例）である。兄弟姉妹（5例）、夫と妻（4例）がこれに続く。

なお、検討対象の35例中には、主体を指摘できない用例がある。すなわち当該用例①と同様に、くあはず＋人＋なし（5例）（用例①を含む）の表現形式をとるものがある。その他（人に くあはせぬ 事（1例）、くあはず＋人 もがな（1例）の表現形式も認められる。また、源氏が「くあはず」人が誰であるのかは留意すべきで、用例①「ものをものたまひあはずべき人」を考察するうえに重要である。それは、螢兵部卿宮・頭中将・柏木・六条御息所・朝顔の姫君である。

次に、何について「言ひ・のたまひ・語り・語らひ・聞こえ・問ひ＋あはず」のかという、対象と用例数を示したものが表4である。

男女関係に関連する事柄を対象とする用例が最も多く、12例である。その具体的内容は、備考欄に詳しく記した。結婚（求婚）（4例）・手引き（2例）に関する用

例が半数を占める。また三角関係をめぐる失踪事件、男の強行侵入事件、不義密通による懐妊等、事件に関する事柄が多く見られることも特筆すべき点である。

以上、主体と対象の検討を通して、検討対象の35例について概観した。

四、男女関係に関連する事柄を対象とする用例の検討

対象が、男女関係に関連する事柄は、表4に詳しく記したが、手引きや男の強行侵入、失踪といった事件に関することが多い。

「言ひ・語り・語らひ＋あはず」主体は、直面する事件に対する事実認識をしたうえで、事件対応に追われ、計画や方策を思いめぐらし、隠蔽工作や口固めといった事後処理に奔走し、そこに解決すべき問題が存在する場合には、問題意識を共有し、その解決に向けて、意見の折り合わせをし、何らかの一致した結論を導き出し、それを実行している。

以下、用例を通して具体的に見てみたい。

表3 主体及び用例数

主 体	用例数	備 考
主に近侍する人々 (女房・命婦・乳母等) 庇護する人々	12	*王命婦-御乳母子の弁・右近(夕顔の乳母子)-豊後介・ 右近(浮舟の乳母子)-侍従の君(浮舟の侍女)・ 弁の尼(八の宮家の女房)-八の宮邸に仕える女房たち 等
兄弟姉妹	5	兄(源氏)-弟(螢兵部卿宮)・姉(大君)-妹(中の君)・ *兄(禪師の君)-妹(未摘花)・ *兄(横川の僧都)-妹(妹尼)・*姉(空蟬)-弟(小君)
夫妻	4	夫(左馬頭)-妻(指喰いの女)・夫(薫)-妻(浮舟)・ 夫(藤式部丞)-妻(博士の娘)・一般論
親	2	父親(明石の入道)-母親(明石の尼君)・ 母親(明石の尼君)-乳母(注1)
その他	6	源氏-頭中将・源氏-柏木・ 源氏-六条御息所・源氏-朝顔の姫君・薫-大君・ 宿直所に集まった人々
合 計	29	

(注1) 母親と乳母が「言ひあはす」用例については、「主に近侍する人々」の項目にも計上した。

(注2) *の用例は、「ず」「なし」ともなう否定表現の用例で、〈(え)～あはせ+ず〉〈～あはす べきにあら ね ば〉〈～あはせ む方+なし〉の表現形式をとる。

表4 対象及び用例数

対 象	用例数	備 考
男女関係に関連する事柄	12	結婚(求婚)=4・手引き=2・三角関係の果ての失踪事件=2・ 三角関係にある男が、逢瀬の現場に踏み込む事件の事後合意=1・ 男の強行侵入事件の隠蔽等事後処理=1・不義密通による懐妊=1・ 男の強行侵入事件に対する、女主の苦悩=1
こと・事	6	おほやげごと・わたくしごと=2・はかなきあだ事・まことの大事=1 何ぞまの事=1・その事かの事=1・何とはなき事=1
世	3	はかなき世の有様=1・かひなき世の物語=1・世の憂さつらさ=1
身	2	我が身ひとつの憂さ=1・様々の人の身の上のこと=1
もの	2	
むつ(睦)ごと	1	
心	1	思ふ心=1
皇統の断絶	1	
帝による朝政の怠り	1	
悲しみを慰める方策	1	妻(更衣)亡き後の耐え難き悲しみを慰める方策=1
その他	5	母が行方不明の幼子の処遇(実父に知らせるか否か等)=1・ 邂逅した者双方のこれまでの経緯=1・若き女の身での出家=1 等
合 計	35	

③ 世に知らぬ心細さの慰めには、この君をのみ頼みきこえたる人々なれば、思ひにかなひたまひて、世の常の住み処に移ろひなどしたまはむを、いとめでたかるべきことに言ひあはせて、「ただ入れたてまつらむ」と、みな語らひあはせけり。

〔総角(5) 一三三三〜四〕

④ 例の、内裏に日教経たまふころ、さるべき方の忌待ち出でたまふ。にはかにまかでたまふまねして、道の程よりおはしましたり。一 中略一 小君には、昼より、源氏「かくなん思ひよれる」とのたまひ契れり。一 中略一 女も、さる御消息ありけるに、思し**「たばかり」**つらむほどは浅くしも思ひなされねど、さりとして…一 中略一…ほど離れてを」とて、渡殿に、中将といひしが局したる隠れに移ろひぬ。

〔帚木(1) 一八五〜六〕

⑤ 小君「例ならぬ人はべりてえ近うも寄りはず」源氏「さて今宵もやかへしてんとする。いとあさましう、からうこそあべけれ」とのたまへば、小君「などうか。あなたに帰りはべりなば、**「たばかり」**はべりなん」と聞こゆ。さもなびかしつべき気色にこそ

はあらめ。童なれど、物の心ばへ、人の気色見つべくしつまれるを、と思すなりけり。一 中略一 源氏「しづまりぬなり。入りて、さらば、**「たばかれ」**と、のたまふ。この子も、妹の御心は撓むところなくまめだちたれば、言ひあはせむ方なくて、人少ならんをりに入れたてまつらんと思ふなりけり。

〔空蟬(1) 一九六〜七〕

⑥ 匂宮「…御返りには、今日は物忌など言へかし。人に知らるまじきことを、誰がためにも思へかし。他事はかひなし」とのたまひて…一 中略一 右近、人に知らすまじうはいかがは**「たばかり」**べき、とわりなうおぼゆ。一 中略一 右近、いかにせむ、殿なむおはする、と言ひたらむに、京にさばかりの人のおはしおはせずおのづから聞き通ひて、隠れなきこともこそあれ、と思ひて、この人々にも、ことに言ひあはせず、返り事書く。

〔浮舟(6) 一一九・一二〇・一二二〜三〕

宇治を訪れた薫を、八の宮邸に仕える女房たちが、大君に手引きすることを画策するのが用例③である。薫を唯一「頼み」とする弁をはじめ女房たちは、自分たちの

願望、大君を薰と結婚させることを最善のことと「言ひあはせ」たうえで、「ただ入れたてまつらむ」と手引きの実行を「みな語らひあはせ」た。「みな」の語が、女房たちの総意であることを表している。

さて、方違えて訪れた紀伊守邸で空蟬と契った源氏は、「また、あひ見るべき方なきを」（帚木（一）一八一）と認識しつつも、空蟬の弟小君を文使いにして、再びの逢瀬を目論んだ。用例④・⑤には、小君をして空蟬のもとへ手引きをさせる源氏の言動と心情が、時の推移とともに叙述される。なお④は二度目の、⑤は三度目の、紀伊守邸訪問の場面である。そして、これら一連の手引きの場面で多用されるのが「たばかり」の語である。「たばかり」について、『古語大辞典』（一〇一六頁）は次のように記す。

たばかり【謀る】「他ラ四」《「た」は接頭語》

- ① 思いはかる。思案する。工夫する。計画を立てる。
- ② （転じて）偽る。だます。

源氏自らの「たばかり」が詳細に語られるのが用例④である。「さるべき方の忌」を「待ち」、源氏は紀伊守邸へ向かうが、事前に（昼より）小君にも「契」り、空

蟬にも「御消息」を遣り、周到に事を進める。結局、空蟬は逡巡の末に、小君の目を逃れて身を隠した（渡殿に、中将といひしが局したる隠れに移ろひぬ）。奔走する小君の努力むなしく、空蟬と逢うことは叶わなかつたのである（君は、いかにたばかりなきむと、まだ幼きをうしろめたく待ち臥したまへるに、不用なるよしを聞こゆれば…」（帚木（一）一八七）。

空蟬への思いを一層つのらせる源氏の、小君に対する働きかけは次のように記される。「小君に、「いとつらうもうれたうもおほゆるに、しひて思ひかへせど、心にしも従はず苦しきを、さりぬべきをりみて対面すべくたばかり」と、のたまひわたれば…」（空蟬（一）一九二）。小君に對して「さりぬべきをりみて対面すべくたばかり」と、源氏は執拗に命じ続けた。

源氏の切実な言葉を真摯に受け止めた小君の描写である。「幼き心地に、いかならんをりと待ちわたるに、紀伊守国に下りなどして、女どちのどやかなる夕闇の道たどたどしげなるまぎれに、わが車にて率てたてまつる」（空蟬（一）一九二）。小君は、「いかならんをりと待ちわたる」が、遂に紀伊守が国に下る機をとらえて、源氏

を紀伊守邸へ導くことに成功する。

これに続くのが用例⑤で、小君が、源氏を空蟬の寝所へ手引きするべく「たばかる」様子が詳述されている。現場には、紀伊守の妹軒端萩（「例ならぬ人」）が来ており、そのことは小君にとつて想定外のことであったが、「人少なならんをりに入れたてまつらんと思ふなりけり」というのが、小君の腹づもりであった。

先の手引きの折、身を隠して逢瀬を避けた（用例④）空蟬のことを、「妹の御心は挽むところなくまめだちたれば」と冷静に認知する小君は、源氏手引きの案件について、空蟬と問題を共有し、申し合わせ、承服させる方策はないと判断する。そのことが「言ひあはせむ方なくて」の表現であろう。

ところで、源氏は空蟬との逢瀬を果たすべく、小君を文使いにして手引きをさせたが、幼い小君を、源氏はどのように見ていたのであろうか。小君と初対面の場面は次のように叙述される。「妹の君のこともくはしく問ひたまふ。さるべきことは答へ聞こえなどして、恥づかしげにしづまりたれば、うち出でにくし。されどいとよく言ひ知らせたまふ」（帚木（一）一八二）。また用例⑤に

は「童なれど、物の心ばへ、人の気色見つべくしづまれるを、と思すなりけり」とある。

源氏の小君に対する評価は、「しづまる」に象徴される。童でありながら、空蟬に関する質問に対して「さるべきことは答へ聞こえ」、「物の心ばへ、人の気色」を認知できる知力と沈着冷静な判断力を具えていたからこそ、源氏は小君を空蟬との仲立に定め、密かな目論見を「いとよく言ひ知らせ」たのであった。直面する事態に対する事実認識や問題意識を共有できなければ、用例④に見た源氏による緻密で周到な「たばかり」の共謀者にはなり得ないのである。

匂宮による強行侵入事件の事後処理、隠蔽工作に奔走する右近の姿を描くのが用例⑥である。薫を装い浮舟の部屋に侵入した匂宮は、「人に知らるまじきことを、誰がためにも思へかし」と右近に命じ、右近は「人に知らすまじうはいかがはたばかるべき」と匂宮滞在を隠蔽すべく、次々と嘘を重ねて「たばかる」。

浮舟を迎えに来た京の人々（母中将の君が差し向けた）は、薫の動静なども周知している可能性があり、浮舟が石山参詣に行けなくなった事情等について情報交換する

ことは、匂宮滞在の露頭にもつながりかねないと右近は危惧する（「隠れなきこともこそあれ」）。詳細に打ち合わせることを敢えて回避した、このことが「ことに言ひあはせず」であろう。

この事件は、三角関係に悩んだ末の浮舟の失踪事件へとつながる。右近と侍従は、浮舟失踪の真相を、母中将の君をはじめ薫、匂宮等に開示すべきか否かという点について「言ひあはせ」（蜻蛉（6）一一〇〇）、さらに「骸」無き「葬送」を強行する。緊急に解決すべき問題に直面して、然るべき解決策を求めて合議せざるを得なかったのである。

ところで源氏物語には、「言ひあはす」「語らひあはす」「聞こえあはす」の自動詞「言ひあふ」（14例）・「語らひあふ」（1例）・「聞こえあふ」（9例）が認められる。その対象（内容）は、他動詞「言ひあはす」「語らひあはす」「聞こえあはす」のそれとは対照的である。すなわち、人々（女房たち・供人たち等）の噂話・陰口・悪口・文句を対象とする用例が最も多く（12例）、未経験の事象（暴風雨・意識不明の人の発見等）に直面した人々の、率直な思いや感想も対象となる。また、自然現象や物事の道

理（「…ものぞ」）、「人の御宿世」といった、人知の及ばない事柄に対して用いられている点も重要である。

「言ひあふ」「語らひあふ」「聞こえあふ」は、そこに集う人々による噂話・陰口・文句・感想等の、個々人の自由な発言（用例②「口々」）に対して用いられる。一方「言ひあはす」「語らひあはす」「聞こえあはす」用例には、事件や問題に直面し、その事後処理や問題解決にさし迫られた人々が、問題意識を共有しつつ、方策を探り（「たばかり」）、然るべき解決の道筋を求めて意見を交換し、摺り合わせる姿が描写されており、対照的である。そしてこの相違は、自動詞「あふ」と他動詞「あはす」の語義の相違に基づくものである。

五、夫と妻を主体とする用例の検討

⑦ 朝夕の出で入りにつけても、おほやけわたくしの人^①のたたまひ、よきあしきことの、目にも耳にもとまるありさまを、うとき人にわざとうちまねばんや^②は、近くて見ん人の聞きわき思ひ知るべからむに、

語りもあはせ^③ばやと…

〔帚木（1）一四〇〕

⑧ 式部「まだ文章生にはべりし時、かしこき女の例

をなん見たまへし。かの馬頭の申したまへるやうに、おほやけごとをも言ひあはせ、わたくしさまの世

に住まふべき心おきてを思ひめぐらさむかたもいたり深く、才の際、なまなまの博士恥づかしく、すべて口あかすべくなんはべらざりし。一中略一 いとあ

はれに思ひ後見、寢覚めの語らひにも、身の才つき、おほやけに仕うまつるべき道々しきことを教へて、いときよげに、消息文にも仮名といふもの書きませず、むべむべしく言ひまはしはべるに、おのづからえまかり絶えて、その者を師としてなん、わづかなる腰折文作ることなど習ひはべりしかば、今にその恩は忘れはべらねど、なつかしき妻子とうち頼まむには、無才の人、なまわるならむ振舞ひなど見えむに、恥づかしくなん見えはべりし。まいて、君達の御ため、はかばかしくしたたかなる御後見は、何にかせさせたまはん。

〔帚木（一）一六一―二二〕

⑨ ひとへにうち頼みたらむ方は、さばかりにてありぬべくなん思ひたまへ出でらる。はかなきあだ事

をもまことの大事をも、言ひあはせたるにかひなからず、龍田姫と言はむにもつきなからず、織女の手にも劣るまじく、その方も具して、うるさくなんはべりし」とて、いとあはれと思ひ出でたり。

〔帚木（一）一五二〕

左馬頭が、今は亡き指喰いの女を、「ひとへにうち頼みたらむ方」、理想に叶った妻として思い出し、偲ぶのが用例⑨である。「はかなきあだ事をもまことの大事をも、言ひあはせたるにかひなからず」について、『源氏物語注釈一』(以下『注釈』)は次のように指摘している。「この一文は馬頭が前に女性に関する一般論として語った「折節にし出でむわざの、あだ事にもまめ事にも…」（帚木八）と照応する」。その照応する一節を以下に引用する。「立ち離れて、さるべきことをも言ひやり、をりふしにし出でむわざの、あだ事にもまめ事にも、わが心と思ひ得ることなく、深きいたりなからむは、いと口惜しく、頼もしげなき咎やなほ苦しからむ。常はすこしそばそばしく、心づきなき人の、をりふしにつけて出でばえするやうもありかし」（帚木（一）一四〇―二）。

「あだ事」「まめ事」について、『注釈』は「あだ事」

が遊びを含む趣味的な事柄であるとすれば、「まめ事」は実際的で実用的な事柄。公務に関することも含まれる」（二二五頁）と説く。用例⑨で左馬頭が想起する指喰いの女は、「はかなきあだ事」「まことの大事」いずれに對しても、左馬頭の期待以上に「言ひあはせ」ることのできる理想的な妻であった。

また『注釈』は、「ひとへにうち頼みたらむ方」（用例⑨）について、「ただひとへにものまめやかに、静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼み所には思ひおくべかりける」（帚木九）を踏まえている」（二六七頁）と注する。「頼み」とすべき妻に必要な素質として、「ものまめやか」「静かなる心のおもむき」が指摘される。一方、先に引用した二節には、「わが心と思ひ得ること」「深きいたり」の欠落が、「頼もしげなき咎」となると語っている。左馬頭は、知的であることが、理想的なあるべき妻の必須条件であるとする。そして知的であるからこそ、「はかなきあだ事をもまことの大事をも、言ひあはすことが可能なのである。

さて用例⑦は、「わがものとうち頼むべきを選らんに…」（帚木（一）一三七）で始まる左馬頭の女性論、理

想的な、あるべき妻についての一般論である。「近くて見ん人」、身近にいる妻と「おほやけ」「わたくし」の事柄について「語りもあはせ」たいという願望が語られる。公私にわたる、耳目にとまる様々な事柄について「語りあはす」ことを可能にするのは、妻がそれらの事柄について「聞きわき思ひ知る」ことができること、つまり妻が知性を具えていることであると、左馬頭は説くのである。

用例⑧について。諸注釈書が注するように、「かの馬頭の申したまへるやうに」は、左馬頭の言（用例⑦）を指し、藤式部丞は、左馬頭の発言をふまえて自らの体験談を展開する。語り出したのは「才の際、なまなまの博士恥づかし」き「かしこき女の例」、博士の娘を妻にした若かりし日の体験談であった。

左馬頭の言をふまえての「おほやけごとをも言ひあはせ」の表現は、「わたくしごと」をも「言ひあはせ」たことを意味する。実際、「わたくしざまの世に住まふべき心おきてを思ひめぐらさむかたもいたり深く、「いとあはれに思ひ後見」と語られる。一方「おほやけごと」についてはどうであろうか。「寢覚めの語らひにも…」以下、夫婦の語らひを通して、才媛の妻から教え導かれ

た「おほやけごと」について、藤式部丞は具体的かつ詳細に語っている。知を極めた「かしこき女の例」を披瀝することで、理想の妻に知性が必須であると説く左馬頭の言を、強く肯定するのである。

知を極めた「かしこき女」は、博識で、物事の道理をわきまえ、物事の本質を見抜く力や判断力を具えた人であり、「おほやけごと・わたくしごと」を「言ひあはず・語りあはず」人であった。すなわち、公私にわたる多様な事柄・問題について事実認識をし、問題意識を共有しつつ、然るべき解決、あるいは結論に向けて意見を交換し、摺り合わせることでできる才媛の妻だったのである。

六、「同じ心に」をともなう「言ひ・うち語らひ・聞こえ十あはず」用例の検討

⑩ さぶらふ人々も、すこしもの言ふかひありぬべく若やかなるはみなあたらし。見馴れたるとは、かの山里の古女ばらなり。思ふ心をも、**同じ心に**なつかしく**言ひあはず**べき人のなきままには、故姫君を思ひ出できこえたまはぬをりなし。

〔宿木（5）四三二―二〕

⑪ 行きかふ時々に従ひ、花鳥の色をも音をも、**同じ心に**起き臥し見つつ、はかなきことをも本末をとりて言ひかはし、心細き世の憂きもつらさも**うち語らひあはせ**きこえしにこそ、慰む方もありしか、をかしきこと、あはれなるふしをも、聞き知る人もなきままに、よろづかきくらし、心ひとつとつて：
 〔早蕨（5）三三五〕

⑫ 薫「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも、**同じ心に**もて遊び、はかなき世のありさまを**聞こえあはせ**てなむ過ぐさまほしき」と、いとなつかしきさまして語らひきこえたまへば：
 〔総角（5）二二七―八〕

用例⑩について。匂宮と結婚している中の君は、薫の横恋慕に悩む。苦悩する中の君は、この苦境を、「思ふ心」を、「言ひあはずべき人のなき」現状を冷静に認識している。すなわち「すこしもの言ふかひありぬべく若やかなる」女房たちは皆新参者で、これまでの薫との経緯を知らず、この件について「言ひあはず」のは適切では

ないと中の君は判断する。心に浮かぶのは「故姫君」今は亡き大君のこと。嘆息しつつ、「思ふ心をも、同じ心になつかしく言ひあはせ」せた大君のことばかりを想い続けるのである。

用例⑩には、「思ふ心をも、同じ心になつかしく言ひあはせ」せた在りし日の大君と中の君の睦まじき交流の日々が、詳述されている。それは「花鳥の色をも音をも、同じ心に起き臥し見つつ」「心細き世の憂さもつらさもうち語らひあはせ」た心通わす日々であり、しかも「慰む方もありしか」と懐かしく想起される日々であった。

用例⑫で薫が語るのは、大君との理想的な関係についてである。「月をも花をも、同じ心にもて遊び」「はかなき世のありさまを聞こえあはせ」て暮らす日々は、先の場合⑪で見た大君と中の君の心慰む日々と酷似する。

大君と中の君の睦まじき、心慰む日々を支えるのは、「言ひあはす」「うち語らひあはす」人間関係であり、さらに「同じ心に」がこの姉妹をつなぐ絆であろう。なお、大君の心中描写には「同じ心に何ごとも語らひきこえたまふ中の宮は……」（総角（5）一三七）とある。

大君と中の君をつなぐ「同じ心に」について考えてみ

たい。美しき自然を（花鳥の色をも音をも）「月をも花をも」共に眺め、共に感じ、喜怒哀楽を共有することで、おのずと心を交わす関係が醸成される。心の向きを同じくすることが、共感力を高め、ひいては相互理解を深めることにつながり、心の絆になるのである。

「同じ心に」という心を交わし、喜びを共に分かち合う関係性、さらに知性が可能にする（夫と妻の用例⑦⑧⑨）「言ひ・うち語らひあはす」行為によって、たとえば、悩み、憂う状況（心細き世の憂さもつらさも）（用例⑪）に身を置いていたとしても、「慰む方もあり」とその満ち足りない心がしづめられ、心のおさまりを認識できるのである。

用例⑪には、大君を失った中の君の悲嘆の日々も描写されている。大君を喪失したことで、「慰む方もあり」という中の君の心和やかな日々は一転する（をかしきこと、あはれなるふしをも、聞き知る人もなきままに、よろづかきくらし、心ひとつをくだきて）。悲しみに沈み、心鬱ぎ、ただ独り思い煩う日々を過すことになったのである。

以上検討した大君と中の君をめぐる用例（⑩⑪）は、

用例①における源氏の境遇や心情を推察するうえに参考になると思われる。

七、源氏が「聞こえ・のたまはせ十あはず」用例の検討

源氏が「あはず」人については、表3で既に確認した。螢兵部卿宮・頭中将・柏木・六条御息所・朝顔の姫君である。ここでは、当該用例①「ものをものたまひあはずべき人」の解明に有効な用例を検討したい。

- ⑬ ……兵部卿宮渡りたまへり。一中略一昔よりとりわきたる御仲なれば、隔てなく、そのことかのことと聞こえあはせたまひて、花をめでつつおはするほどに…〔梅枝(3)三九七〕
- ⑭ ……衛門督をば、何さまの事にも、ゆゑあるべきをりふしには、必ずことさらにまつはしたまひつつのたまはせあはせしを…〔若葉下(4)二六二〕
- ⑮ かの御息所は…年ごろのやうにて見過ぐしたまはば、さるべきをりふしにもの聞こえあはする人にてはあらむなど…〔葵(2)六九〕

- ⑯ ……かけかけしき筋にはあらねど、なほさる方のものをも聞こえあはせ人に思ひきこえつるを…〔濔標(2)三〇〇〕

用例⑭は、「ゆゑあるべきをりふし」に、源氏が柏木と「のたまはせあはす」用例である。「ゆゑ」について、『注釈』は「本質的に高貴なものや深い由緒を持つ対象に用いる」(三八頁)とし、「ゆゑある事」を「宮中において古い伝統を持つ重要な儀式や催しのこと」(二八頁)と説く。

用例⑬は、明石の姫君の裳着、入内を控えた六条院に、源氏の弟宮、螢兵部卿宮が訪れた場面である。これ以前に、六条院では薫物合が行われていたが、源氏は螢兵部卿宮に、薫物の判を依頼する。

源氏が「聞こえあはせ」た内容は、「そのことかのこと」と具体的に明示されないが、明石の姫君の裳着、入内に関する事柄についてであろう。実際、螢兵部卿宮は入内の調度として、自ら筆を執った草子や、所蔵の『古万葉集』、『古今和歌集』を贈っている。

なお螢兵部卿宮は、冷泉帝御前の絵合において判者をつとめた。その折、学問・芸術・芸能について源氏と論

じ合い、父桐壺院の教育方針についても語っている。「院の御前にて、親王たち、内親王、いづれかは「さまざまとどりの才」ならばさせたまはざりけむ」（絵合（2）三七九～三八〇）。桐壺院の下で、「さまざまとどりの才」を習得し、「才」に関して高い見識を共有できる螢兵部卿宮と源氏だからこそ、「聞こえあはず」、意見を交わし、言葉を重ね合わすことが可能なのである。

用例⑮⑯は、いずれも六条御息所に関する用例である。六条御息所のことを、⑮「さるべきをりふし」に「もの」を「聞こえあはず」人、⑯「さる方の」「もの」を「聞こえあはず」と源氏は認識しているが、これらの用例は重要である。「さるべき」について、『注釈』は「歴としたの意。規範になつた公的なものに対して用いる」（三七頁）と注し、「さる方の」については、「一種の熟語的表現で、歴とした、きちんとしたの意」（二二八頁）と説いている。

「聞こえあはず」対象は⑮「もの」⑯「さる方の」もので、対象を具体的に明示しない汎称的表現（『注釈』五三、六四頁）が用いられており、その点当該用例①と

同一である。

周知の通り、前東宮妃の六条御息所は、高い教養、嗜み、品格を具え、格式を重んじる人として造型されている（「おほかたの世につけて、心にくくよしある聞こえありて、昔より名高くものしたまへば：―中略―：ゆゑは飽くまでつきたまへるものを」（葵（2）四七））。次の叙述は、伊勢から帰京後の住まいの様である。「なほ、かの六条の古宮をいとよく修理しつくるひたりければ、みやびかにて住みたまひけり。よしづきたまへる」と古りがたくて、よき女房など多く、すいたる人の集ひ所にて：」（濔標（2）二九九）。

「よし」が「動詞「寄す」の名詞形で伝統的・典型的なものに抛り所を持つ」（『注釈』三七頁）ということをつまれば、「ゆゑは飽くまでつき」「よしづき」「よしある」六条御息所が、「歴とした」「規範」に合う「公的」な「もの」について「聞こえあはず」人として適任である、と源氏が認めることは首肯できる。

当該用例①に続く「長雨のころ」、紫の上をはじめ藤壺、朧月夜、六条御息所等に宛て、源氏が文を送ったことは既に述べた。伊勢の地の六条御息所からの返書は、「浅

からぬことども書きたまへり。言の葉、筆づかひなどは、人よりことになまめかしく、**いたり深く見えたり**」（須磨（2）一八五）と評される。藤式部丞の知を極めた妻は、「いたり深く」（用例⑧）と評されていた。六条御息所の文にも、「いたり深」きさまが看取できる。

知性を具えた六条御息所だからこそ、源氏と「聞こえあはず」、問題意識を共有しつつ、言葉を重ねて意見を交わし、摺り合わせる事が可能なのである。¹¹

源氏が「聞こえあはず」人は、「さまざまとりどりの才」を身につけた人、また「ゆゑは飽くまでつき」「よしづき」「よしある」「みやびか」な、「いたり深」き人であった。そして「聞こえあはず」内容は、歴とした、規範に適合的な「もの」、例えば朝廷・宮中における歴とした儀式や伝統的な行事、催しに関わるような事柄であることが知られた。

八、結び

当該用例①を再考する。須磨での住まいが調った直後の源氏の心境は「今はと静まりたまふ心地現ならず」と

記されている。時を置いて、明石の入道の身の上話に耳を傾ける源氏が、須磨退去について語る場面がある。「横さまの罪に当りて、思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつるを……」（明石（2）一三二六）。

「横さまの罪」という言葉は、道理に反した不当な罪によって須磨退去を余儀なくされたことを物語る。「現ならず」「思ひかけぬ世界に漂ふ」の表現は、須磨に居を移してもなお、現実と向き合うことのできない源氏の心情をよく表しているといえよう。受け入れ難い現実には、源氏の心はやりきれない思いで満ち溢れている。しかも、源氏の心を「慰む方」は無いのである。

源氏にとってかけがえのない存在である紫の上を京に残して、源氏は単身須磨に退去した。かけがえのない人が傍らにいないことの「慰む方」無き悲しみは、大君を失った中の君の絶望（「をかしきこと、あはれなるふしも、聞き知る人もなきままに、よろづかきくらし、心ひとつをくだきて」（用例⑩））に通ずるものがある。

なお後年、自らと「同じ心に」、つまり同じ意識で明石の姫君の後見を考えてほしいと源氏は紫の上に要請している（「まことは、らうたげなるものを見しかば……思

ひなむわづらひぬる。同じ心に思ひめぐらして、御心に思ひ定めたまへ。いかがすべき。ここにてはぐくみたまひてんや」(松風(2) 四一三)。源氏と紫の上の關係性に、大君と中の君のそれを重ねることの妥当性の傍証となる。

ところで、須磨の住居を然るべく調べた良清朝臣や御庄の司、国守といった「親しく」心寄せ仕うまつる「人々は、源氏が須磨に退去せざるを得なくなった詳しい事情や経緯等を知っていたのであろうか。先に見た用例⑩「さぶらふ人々」についての中の君の認識が思い起こされる。これまでの薫との経緯を知らない新参者の女房たち、「かの山里の古女ばら」、これらの人々は「言ひあはすべき人」ではないと中の君は判断した。

この中の君の姿は、用例①「人騒がしけれども、はかばかしうものをもたまひあはすべき人しなれば」と認識する源氏の姿と重なる。「親しく」心寄せ仕うまつる「人々は、須磨退去をめぐる実情について、恐らく知る立場にはないであろう。この須磨の地には、「ものをもたまひあはすべき人」すら存在しない、というもう一つの苛酷な現実

「はかばかしうものをもたまひあはすべき人」について考えてみたい。「のたまひあはす」対象は、「もの」(汎称的表现)である。対象が具体的に明示されないことでむしろ、人生において直面する公私にわたる多様な事柄・問題等、対象を広く想定できよう。そのような対象について、問題意識を共有しつつ、然るべき解決の道筋を求めて、言葉を重ねて意見交換し、摺り合わせる事が、「はかばかしうものをもたまひあはす」である。

そして、源氏が「のたまひあはすべき人」として、学問・芸術・芸能に造詣が深く(「さまざまとりどりの才」、朝廷・宮中における歴とした儀式や伝統的な行事、催しを重んじ(「ゆゑは飽くまでつき」「よしづき」「よしある」、知性(「いたり深う」、品格(「みやびか」)を具えた人、が考えられるであろう。

⑬ 近き几帳の紐に、箏の琴のひき鳴らされたるも、けはひしどけなく、うちとけながら掻きまざぐりけるほど見えてをかしければ、源氏「この聞きならしたる琴をさへや」など、よろづにのたまふ。

源氏 むつごとを 語りあはせむ 人もがなう き世
の夢もなかはさむやと

―中略― ほかなるけはひ、伊勢の御息所いにしへのみよしよに
 ようおぼえたり。〔明石(2)二四六―七〕

用例⑯は、八月十三夜、源氏が初めて明石の君を訪れた場面である。明石の君に対して源氏が詠み掛けた歌、言葉は「むつごとを語りあはせむ人もがな」であった。

「むつごと」について、『注釈』は「親しい者同士や男女間の親密な語らいを表す」(二四三頁)と記す。また『新全集』頭注には「「むつごと」は「睦言」に「琴」をかける」とある。¹²⁾

親密な言葉を「語りあはせ」、琴を「掻きあはせ」、そのような人を源氏は希求する。

不条理とも思われる須磨への退去、その上傍らには「はかばかしうものをものたまひあはすべき人」すら存在しない。そのことによる耐え難き孤独感や寂寥感。心通わせる人も無く、やりきれない思いを「慰む方」も無く、しかも、このような須磨での暮らしは、いつ果てるとも知れぬのである。独り、憂悶の日々を過す源氏にとつて、「むつごとを語りあはせむ人もがな」は、切実な願望、心の叫びであつたに違いない。

以上のことから、「むつごとを語りあはせむ人もがな」は、

当該用例①「はかばかしうものをものたまひあはすべき人しなれば」と対応関係にある言葉として把握できる。

源氏が歌を詠み掛けた明石の君は、六条御息所を彷彿させる人であつた¹³⁾。「ほかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり」。六条御息所は、源氏が「聞こえあはず」(用例⑮⑯)人である。事実、伊勢の地から須磨へ届けられた返書は、源氏の心を動かし、慰めた。

六条御息所に大層よく似た明石の君とのめぐり逢いは、およそ一年半前の須磨退去の折に源氏が直面した、「はかばかしうものをものたまひあはすべき人しなれば」という深刻な問題の解決を予感させる。そして、ひとすじの光明とも思われた明石の君は、その後の源氏の人生において重要な役割を果たす人となる。

註

(1) 本文引用は、『日本古典文学全集』小学館(以下『全集』)に拠るが、一部漢字を平仮名に、平仮名を漢字に改めた。また用例引用の際は、「巻名、巻数、頁数」を示す。

(2) 中田祝夫他編『古語大辞典』(小学館、一九九四年、コン

バクト版)、五一、五七―五八頁。

(3) 源氏物語には、「言ひあふ」「言ひあはず」「語らひあふ」「語らひあはず」・「聞こえあふ」「聞こえあはず」等、自動詞・他動詞の対応する語が見られる。

(4) 本稿における源氏物語の用例検索には、池田亀鑑編著『源氏物語大成』（中央公論社、一九七九年）、巻四、索引篇を用いた。上田英代他編『源氏物語語彙用例総索引』（勉誠社）も併せて用いた。

(5) 『大成』は、「のたまはせあはず」項の若菜下12211⑩を、「のたまひあはず」項に重複して載せている。従って「のたまひあはず」4例を、3例に改めた。

(6) 宮島達夫他編『日本古典対照分類語彙表』（笠間書院、二〇一四年）の「意味分類」によれば、表2におけるNo.1～7の語は「23131（話談話）」、No.8の語は「23132（問答）」に分類される。

(7) 『全集』頭注に「前の紀伊守邸への方違え後、暦の上からいえば、中神の巡行周期の約六十日がたっているはずで、陰暦七月、初秋のころとなるが、文の内容からいえばやはり夏で、やや不審」とある。源氏は、その時を「待ち」構えたのである。

(8) 山崎良幸・和田明美著『源氏物語注釈一』（風間書房、一九九九年）、二六七頁。

(9) 前節において、源氏の「たばかり」の共謀者たり得た小君は、「しづまる」と評されていた。

(10) 「おほやけごと・わたくしごと」を「言ひあはず」才媛の妻の、博識に裏打ちされた言動を、藤式部丞は「むべむべし」「はかばかしくしたたかなる御後見」と評しており、「師として」敬意の念を抱いている。若き日の自分を支えてくれた存在として「今にその恩は忘れ」ていないのである。このような妻に対する認識は、夫婦関係において人格的対等性を認める藤式部丞の意識を反映しているように思われる。平安時代にあつて、この意識は稀有であろう。

(11) 退去した須磨の地での源氏の境遇、苦悩を、的確に認知したことが推察される六条御息所の御文に、源氏は「あはれ」をおぼえ、早速返書をしたためた。「かく世を離るべき身と、思ひたまへましかば、おなじくは慕ひきこえましものをなごなむ」（須磨（2）一八七）。

(12) 帰京の宣旨が下り、源氏は明石の浦を離れることになる。明石の君との別れの場面で、琴の琴と箏の琴を掻きあはせる。「さらば、形見にも忍ぶばかりの「こと」をだに」とのたまひて、京より持ておはしたりし琴の御琴取りに遣はして、心ことなる調べをほのかに掻き鳴らしたまへる……中略―心の限り行く先の契りをのみしたまふ。「琴はまた掻き合はする」までの形見に」とのたまふ」（明石

(2)二五五―六。『新全集』頭注は「一こと(言)」に「琴」をかける」と説く。

(13)受領階級の父を持つ明石の君の文、楽の音、態度に、源氏が「やむごとなき人」「藤壺」「皇女たち」を彷彿し、「上衆めく」「上衆めかし」と評することは、指摘したことがある(拙稿『源氏物語』若菜下、女楽における琵琶叙述について―「上手めく」「上衆めく」をめぐる―)(『愛知大學國文學』第42号、二〇〇二年)。

〈付記〉 本稿の作成にあたり、和田明美先生より御指導賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

(ないとう さとこ・本学卒業生)

愛知大学総合郷土研究所研究員)